



うそだとわかるうそをつく

～子どもの生活の工夫④～



田中康雄先生の著書『発達障害の子どもの生活の工夫と伸ばす言葉がけ』からシリーズでお届けしている「子どもの生活の工夫」4回目の今回は「うそだとわかるうそをつく」についてです。

◇どうしてうそをつくのかを考えてみましょう

どうして、その子が「うそ」をつくのかを考えてみましょう。もしかしたら、その子のなかでは、「本当」なのかもしれません。叱るよりも、その子の言葉を受け止めて、望ましい言動を根気よく伝えていきましょう。失敗を恐れている場合は、今回失敗したとしても「こうすれば次に取り戻せる」という経験を重ねていくことも大切です。

◇理由を探る～その子のなかでは「本当かも

時間の感覚は大きくなるにつれて身についていきますが、抽象的な表現が苦手な子どものなかには、時間の概念が難しい子どもがいます。遊園地に行ったのは2年前なのに、悪気なく、昨日行ったように話すことがあります。また、空想にふけてしまう子どもの場合は、空想と現実の違いがあいまいになることもあります。ですので、そのことを「うそでしょ」と責めても、本人はうそをついているとは思っていません。そんなときは、「〇月〇日のことだったよね」といった受け止めましょう。「遊園地に行った

のは3歳のときだったけど、よく覚えていたね」と伝えると、わかってもらえたと思ってくれるでしょう。

◇理由を探る～叱られたくないと思っているかも

考える前に行動してしまう子や、じっとしていることが苦手な子の場合、どうしても失敗することが多くなります。お家の人は、子どもが「知らない」「わからない」と答えても、「うそをつかないで!」と感情的にならず、気をつけてもらうためにも、冷静に穏やかに、「お花にはさわらず見ようね」「花びんが倒れていたら、教えてね」と望ましい行動を具体的に伝えましょう。

◇理由を探る～「きちんと説明すればわかってもらえる」という経験も大切です

例えば、妹をたたいたところをお家の人が見て注意したとき、子ども本人が「たたいてない」と言ったり、きき、もう少し本人の言い分を聞いてみましょう。先に妹がたたいた場合であれば、妹が先にいやなことを言った場合もあるでしょう。最初からうそと決めつけないで、子ども本人の言い分を聞くことも大切です。公平に判断された経験は、「きちんと説明すればわかってもらえる」という経験になるでしょう。最初からうそと決めつけてしまうと、子ども本人と妹、子ども本人とお家の人、それぞれの人間関係を悪くしてしまいます。そうならないように、「ん?」と疑問に感じたら、本人の言い分に耳を傾けましょう。

子どもがうそをついているなと大人が思う時、一番わかってほしいと思っているのはその子自身。田中先生のお話を参考に、もっと子どもと向き合っていきたいと考えさせられました。

辺見妙子

給食だより



野菜でつくる簡単おいしいナチュラルレシピ

板麩をお肉代わりに使う

お肉のコクや旨味に勝るとも劣らない——板麩を上手に使うと、こんな裏技が身につきます。保存がきくので、いつでも食品庫にストックしておきたいものです。

板麩とキャベツの肉なし回鍋肉

材 料 (3～4人分) 味つけ板麩2枚、キャベツ300g、メンマ35g、ショウガ5g、合わせ油大さじ3、味噌だれ(麦味噌30g、水大さじ2)、水大さじ2

作り方 1.味つけ板麩は縦に開いて7等分(2.5～3cm)に切る。キャベツは大きめの一口大にちぎって、芯のかたい部分は包丁を入れる。メンマは大きいものは半分に切る。ショウガは千切りにする。

2.味噌を水で溶いて、味噌だれをつくる。

3.中華鍋に油を熱してショウガを炒め、香りがしてきたら、板麩を入れて焼きつけるようにして両面を焼き、皿に取り出す。

4.3の中華鍋にキャベツを入れてさっと炒め、水大さじ2を加えてふたをして、中強火でキャベツに火が通るまで蒸し煮する。

5.4に、2の味噌だれをまわし入れ、メンマと板麩を加えて、炒め合わせる。

